

タイ教育研修で学んだこと ーバンコクの寺院についてー

坂本 章裕

(生徒指導力高度化コース第7期生)

はじめに

9月13日から21日までの9日間、京都教育大学大学院連合教職実践研究科が主催する、タイで行われた海外教育プログラムに私は参加した。研修期間中、タイの人々の生活は仏教と密接に関わっていることがわかった。そして寺院の様子や由来について深く知ることができた。今回、タイの首都であるバンコクで参拝した寺院について本報告書では述べることにする。

1. エメラルド仏寺院の様子

エメラルド仏寺院はタイではワットプラックオと呼ばれている。正式名称はエメラルド仏を安置した寺院の俗称という意味の「ワットシーラッタナーサーサダーラーム」である。

エメラルド仏寺院はプラ・マハー・モンティン建物群の北側の門により連結されている王室守護寺院である。寺院建築の全ての特色を備えているが、王室専用の寺院なので、僧侶が住むことはないため、僧坊は見られない。



エメラルド仏寺院の本堂

本堂の内部は見事な壁画で装飾されている。

エメラルド仏の正面、東側入口の上段の壁には仏陀が悟りを開かれる寸前の場面が描かれている。それは大地の女神トラニーが徳の証人として現れ、亀の毛を振絞り悪魔マーラ（煩惱）を退散させているエピソードである。南側の壁には「仏陀の一生」の誕生、出家などの場面、北側には説法、入滅などの場面、窓の間の壁画には「仏陀の前世」からの場面が描かれている。エメラルド仏の背後、西側には仏教の宇宙観が描かれている。

2. エメラルド仏の由来

エメラルド仏は、実際にはエメラルド色をした碧玉で彫られている。1434年、北タイ地方のチェンライのチェデイ仏塔が落雷で破壊され、その内部から漆喰で覆われた仏像が発見された。その仏像は僧房に納められていたが、ある日、大僧正がその鼻の部分のはげ落ちたところ

から中に緑色の仏像があるのを見つけ、漆喰をはがしてエメラルド仏を取り出した。

たくさんの人が各地からこの尊いエメラルド仏を参拝しにやってきたという。当時、チェンライの町はチェンマイ王の統治下にあり、チェンマイ王であるサムファカン王は、この尊い仏像をチェンマイに迎えようと三度も象を送ったが、その手前のランパーンへの分岐点まで来ると、その度にランパーンの町に走って行ってしまった。そこで、王はこの仏像を守っている精霊がこの町に留めて置きたいのではないかと察して、エメラルド仏をランパーンの町に安置することを許可した。こうしてこの仏像はランパーンの町に32年間程とどまった。1468年、強力なチェンマイ王のティロカ王は、ついにエメラルド仏をチェンマイに運び、チェディルアンと称される大仏塔の東側の壁の中に安置した。

1551年、当時のチェンマイ王は皇太子がいないまま他界した。王女の一人はラオス王の下に嫁いでおり、チャイチェタ王子が誕生していた。大臣たちは15歳になったこの王子を王としてチェンマイに迎えた。その後、父君のラオス王が亡くなったので、王は祖国に帰りたいと思い、1552年、当時のラオスの首都であったルアンプラバンにエメラルド仏を持って帰国してしまった。王は必ずチェンマイに帰ってくると大臣たちに約束したが、ついにチェンマイに戻らず、エメラルド仏もその後12年間ルアンプラバンにとどまった。

1564年、チャイチェダ王はバイナウング王の率いるビルマ軍に攻撃され、都をヴィエンチャンに移した。その時、エメラルド仏も一緒にルアンプラバンから運び出され、214年間ヴィエンチャンに留まることになった。

1778年、ラーマー一世は、まだタークシン王の将軍であったトンブリ王朝時代にヴィエチャンを占領し、エメラルド仏をタイ国に再び持って帰った。1782年に彼はラーマー一世として即位し、1784年3月22日、トンブリから新都バンコクのエメラルド仏寺院にこの仏像を安置した。バンコク王朝以来、この美しいエメラルド仏はタイ国民の本尊仏としてあがめられている。

3. 衣替の儀式

ラーマー一世はこの仏像のために暑期と雨期の二つの衣をつくった。ラーマ三世は乾期のためにもう一つの衣を加えた。この衣替の儀式は年に三回、王自らの手によって行われる。以前の王たちはウボーソット内で儀式に参加している王子たち、及び政府高官にだけ聖水をかけていたが、プーミポン国王陛下はその伝統を打ち破り、ウボーソットの外の参列者にも聖水をかけ祝福を与えるようになった。



衣替の際の衣装の種類

4. エメラルド仏の概要

エメラルド仏のひざ幅は48.3cm、高さは玉座も含めると65cmになる。この仏像は半跏趺坐をとり、北部タイで後期チェンセーン、すなわちチェンマイ様式によって、15世紀より少し以前に彫られたと推定されている。又、別の説として、この仏像は南インド、又はスリランカから由来しているとも言われている。というのは、禪定印を結ぶ仏像はタイ国では数少なく、南インドやスリランカに多く、その容貌もよく似ているからである。

5. ワット・ポーの様子

ワット・ポー寺院の正式名称はワットプラチェートウポンウィモンマンカララーラム＝ラーチャウォーラマハーウィハーンという。西暦1788年ラーマ一世によって建てられたタイ国第一級王立寺院で、首都バンコクで最も大きく、古い寺院である。

巨大な涅槃仏が有名で、涅槃寺とも呼ばれることもある。ラーマ1世によって県立された本堂は、外回廊と内回廊によって二重に取り囲まれていて、150体の仏像が安置されている。本堂の回りには、チャクリー王朝の、ラーマ1世から4世までの歴代王を象徴する4基の大きな仏塔が据えられている。中国から渡ってきた冬季の破片をはめ込んで造られた鮮やかな仏塔は、緑が1世、白が2世、黄色が3世、青が4世を表しており、中にはそれぞれ王の遺骨が納められている。

ラーマ3世は各分野の有識者を集め、ワット・ポーの本堂や回廊、礼拝堂、そしてそれらの回りに立っているサーラーの壁や柱にタイ医学や占星術・仏教教理・芸術・歴史などに関する知識をわかりやすく解説する絵や文章を描かせ、寺を訪れるすべての人びとに当時最高の知識を解放した。ワット・ポーはタイの知識の殿堂と呼ばれるようになり、特にタイ医学やマッサージに関する知識が後世に残り、マッサージの総本山として知られるようになった。

6. ワット・ポーの涅槃仏

一般的には涅槃仏は、頭は北向き、顔は西向きとされおり、これば俗に人が亡くなったときに「北枕」とされることに関係していると考えられている。ラーマ3世による命で制作が始まり、足の裏にはインドと中国とタイの混合様式で仏教に関することが描かれていて、真珠母貝でできた精巧な螺鈿加工が特徴的である。ワット・ポーの涅槃仏を見ることができるのは礼拝堂であり、礼拝堂はレンガで造られ、外はしっくい固められお



ワット・ポーの涅槃仏

り、全身金箔で覆われている。全長は46メートル、高さは15メートルにも及ぶ非常に壮大なスケールを誇っている。見上げるほどに大きい仏像は、日本のお寺などでみるものとはまた一

味異なり金色がとてもインパクトのある光景を織り成している。涅槃仏とは、釈迦が入滅したときの様子を表した仏像といわれており、目を開いて横たわっている場合と目を閉じて横たわっている場合では、その意義が異なる。目を開いている時は仏像が最後の説法をしている様子を表しているといわれており、目を閉じている場合には全てを終えて入滅する様子を表しているといわれている。ここワット・ポーの涅槃仏は、目を開いて横たわっているため、最後の説法をしていると考えられている。

おわりに

今まで映像でしか見たことの無いタイの寺院を実物で見ることができ、タイの人々の信仰の深さを体感することができた。そうした信仰の深さを寺院の歴史から知る事ができたり、寺院が人々の生活と結びついていたことがわかった。今回はバンコクの寺院のみに焦点を当てたが、チェンマイの寺院についても詳しく知りたいと考えている。

今回の研修はチュラロンコン大学の学生、ラチャパッド大学の学生たちが毎日バディとしてタイの文化や教育について教えてくれました。タイの学生たち、引率をしてくださった佐々木准教授、畑中准教授に本当に感謝しております。ありがとうございました。



引用文献

- スパットラディット・ディスクン（1987）『エメラルド仏寺院の歴史』 タイ国宮内庁出版。
- 『Yutika official Web Site| タイ王国ワット・ポー寺院タイ伝統医療講師』
<http://www.yutika.net/watpo/index.html>（2015/10/01アクセス）